

白雲片片

第五回

未だ嘗て塩醬を欠かさず

今回は南嶽懷讓禪師、その法嗣の馬祖道一禪師、そして大慧宗杲禪師が登場する古則を紹介します。懷讓禪師と道一禪師は我々からすると青原行思禪師や石頭希遷禪師と大体同じ時代の方で、宗杲禪師はそれより四百年ほど後の方です。

正法眼藏三百則の第二百二十三則

『南嶽大慧和尚、馬祖の江西に化を闡くを聞き、師、衆に問うて云く、道一、衆の為に説法すや不や。衆云く、已に説法す。師乃ち一僧を遣わし去かし

めて云く、伊が上堂の時を待ちて、但だ作麼生と問うべし、伊が道う底の言語、記して將ち来たれ。僧、去きて師の旨に一如す。回りて師に謂いて云く、馬師云く、胡乱自從り後三十年、未だ嘗て塩醬を欠かさずと。師、之れを然りとす。

後に径山の杲、拈じて云く、雲門は然らず、夜夢の祥ならざれば、門に大吉と書す。』

以上が古則の全文です。

文中の「南嶽大慧和尚」というのは懷讓禪師のことです。懷讓禪師は諡号(死後に贈られる名)が「大慧禪師」なので、ここではそれが使われています。「師」というのも同じく懷讓禪師を指し、「伊」は道一禪師を指しています。終盤に出てくる「杲禪師」というのは宗杲禪師のことです。昔は目上の方の諱(本名)を明

記するのは失礼だと考えていましたので、ここでは「宗」の字は書いてありません。「雲門」というのは宗杲禪師が一時住んでいた「雲門庵」のことで、宗杲禪師自身を指します。

本文の現代語訳ですが、懷讓禪師は、自分の法嗣である道一禪師が、揚子江の南にある江西という場所で教化を始めたと耳にしたので、自分の弟子たちに「道一は大衆の為に説法をしているか？」と質問をしました。

それに対し弟子たちは「道一禪師は既に説法を始めております」と答えました。すると懷讓禪師は自分の弟子の中から一人を選び、その僧侶に「道一が上堂して大衆に説法する時を見計らい、どうでしょうか？とだけ質問し、彼の答えを紙に書いて持って帰って来い」と言い聞かせ、道一禪師の所へ行かせました。その僧侶は懷讓禪師に言われた通り、道一禪師が上堂するのを見計らって「どうでしょうか？」とだけ質問をしました。こここの「作麼生」は何が聞きたいのか良く分らない漠然とした質問のように思えますが、「あなたの今の状況はどうでしょうか」といった意味があるようです。

そして僧侶は懷讓禪師の所へ帰って来て、道一禪師が「何が何だか分からず出家してから三十年、今まで塩や醤油を欠く事が無かった」と答えたと言った。

そして、その答えを聞いた懷讓禪師は道一禪師の境地を認めました。

それから四百年ほど経って、径山という所にいた宗杲禪師がこの話を取り上げて、私が人から「どうでしょうか？」と質問されたら道一禪師のように答えない。私なら「昨夜見た夢が不吉だったら門に大吉と書く」と言いました。

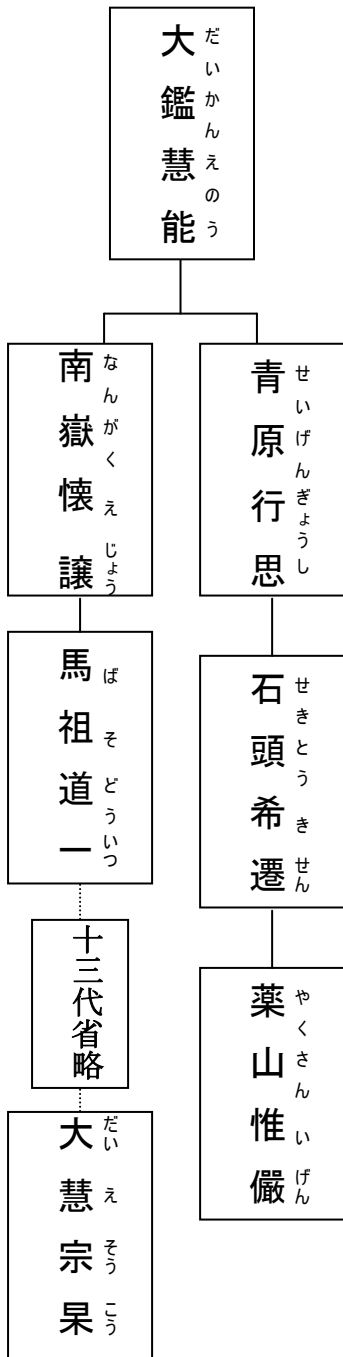
道一禪師は、分けが分からなくて出家してから三十年、塩と醤油といった調味料を欠く事がなかった、まあまあ何とかやってきたと、とても地味な受け答えをされています。その後の宗杲禪師は、不吉なことがあってもそれを打ち消すといった、力強い禅味のある言葉を述べておられます。恐らく、宗杲禪師からすると道一禪師の答えはつまらない、面白みに欠けるといった印象があったのでしよう。

宗杲禪師は、公案（古則）を徹底的に研究、理解して悟りを得ようという、い

わゆる看話禅を完成させ、ただ坐る坐禅を「黙照邪禅」と批判した方です。

道元禪師は普勸坐禅儀の中で「箇の思量底を思量せよ。不思議底、如何が思量せん、非思量、此れ乃ち坐禅の要術なり」と示しておられます。この言葉は薬山惟儼禪師とある僧侶との問答が元になっていきます。現代語に訳すと「例の考えない境地を考えてみよ。考えない境地をどうやって考えるというのだろうか。ものを考えることとは別のことである。これがすなわち坐禅の重要なやり方である」となります。

道一禪師は坐禅にとっても熱心な方だったようですが、若い頃に師匠の懷讓禪師から「お前は何のためにそんなに坐禅をやっているのか」と聞かれ、「仏に成



る為にやっております」と答えたそうです。すると懷讓禪師が近くに落ちていた瓦を磨き始めました。不思議に思った道一禪師が「師匠、何をやっているのですか？」と聞くと「瓦を磨いて鏡にしようと思う」と答えました。道一禪師が「師匠、いくら瓦を磨いたところで鏡にはならないんじゃないですか？」と聞くと、懷讓禪師が「それなら人が坐禅をして仏になるということもないだろう」と言われたそうです。この言葉を聞いた道一禪師は自分の坐禅に対する取り組みが間違っていたことに気がつき、坐禅がどういうものなのか分かったと伝えられています。／参考文献・西嶋和夫著「真字正法眼蔵下巻一」、同「普勸坐禅儀講話」